

## 復活信仰の恵み

## コリント第一 15:3~8

聖書は、信仰にとって「最も大切なこと」は、「キリストが死に、復活したこと」であると言っています。ほとんどの人はイエスが十字架で死んだことを知っています。しかし、多くの人はずいぶんイエスが十字架で死んだのかわかりません。アメリカの信仰に関するある意識調査によるとクリスチャンでさえも「イエス・キリストの復活を信じている」という人は少ないということです。そういう教えとして理解しているということです。そういったことになる理由の一つはキリストの復活が持っている力を本当に知らないからが原因ではないかと思えます。それはとても勿体ないと言おうか残念なことだと思うのです。丁度、ダイヤモンドの原石を手にしながらか、特別価値あるものとは思わないで棚に置いて飾ったままにしてあるようなものです。しかし、今日の箇所「最も大切なことはイエスの十字架での死と復活である」とあるようにこれがクリスチャンの信仰の土台なのです。そういったことからイエスの復活の持つ恵みについて聖書を見てゆきたいと思えます。

## 1) キリストの復活がもたらす罪の赦しと確かな救い

イエスが十字架で死んでくださったのは、私たちの罪のためでした。イエスが「私たちの罪のために死なれた」(コリント第一 15:3) というのには、ふたつの意味があります。ひとつは、私たちの罪がイエスを死に追いやったということです。妬み、憎しみ、裏切り、反逆、冒瀆などの人間の醜く、恐ろしい罪が、神の御子イエスを十字架に追いやりました。しかも、それは当時のユダヤの指導者や民衆、ローマ総督や兵士たちの罪だけではなく、十字架から二千年の後、ここにいる私たちの罪でもあるのです。水野源三さんという詩人がおられました。もう50年前に召された方なので若い世代の方は聞いたことが無いかもしれません。9歳の時赤痢に罹りその高熱によって脳性麻痺を起こし、やがて目と耳の機能以外のすべてを失なわれました。話すことも書くことも、そして動くことも出来なくなってしまわれたのです。しかしそんな中でお母さんが何とか彼と意思の疎通をしようと五十音順を指で指し示したところ、目の動きで応答されたのです。これが47歳で召されるまでの彼の唯一のコミュニケーション手段となりました。ですから水野源三さんは「瞬きの詩人」と呼ばれるようになりました。彼は素晴らしい証しの詩集を出していますがその一つに「私がいる」という詩があります。こんな詩です。「ナザレのイエスを 十字架にかけよと 要求した人 許可した人 執行した人 それらの人の中に 私がいる」(『わが恵み汝に足れり』より) 目と耳しか機能しない。こんな境遇の中に置かれていながらも源三さんは自分の心を見つめた時に自分もまた罪びとの一人に過ぎないことを思われたのです。自分の罪を見つめ、主イエスの十字架を思う時、二千年前、私たちはそこにいませんでしたが、私たちの罪もまた、イエスを死に追いやっているのです。そうであるのに、イエスは、ご自分を死に追いやった罪のすべてを、ご自分の身に引き受け、その刑罰を私たちにかわって受けてくださったのです。

「私たちの罪のために」という言葉のふたつ目の意味は、「ために」すなわち「私たちの罪の身代わりとなって」ということです。第一ペテロ 2:24 はこう言っています。「キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため。その打ち傷のゆえに、あなたがたは癒やされた。」と。もし、イエスが死んだままであったなら、私たちが本当に救われているかどうか分かりません。イエスの十字架とはそういう意味だそうだと推測する以外に受け止めようがありません。しかし復活してくださったことにより、主イエスが語られたことばが確かであるということが分かったのです。つまり「救い」はイエスの復活によって明らかにされたということです。イエスはこの罪と死に打ち勝つことによって、私たちに罪の赦しと永遠の命を与えてくださったのです。このイエスの十字架の死と復活の事実以外にどんなことばや行いをもってしても誰も「あなたの罪は赦された」と断言することはできません。

復活を事実でないとする人たちが決まって言うことは、復活は、「あとになって作られた神話である」ということです。はたしてイエスの復活は神話なのでしょうか。いいえ、違います。神話というものは、

長い時間をかけて、大抵、何世代か後にまことしやかなものに作られるものです。時間も、場所も、はたまた登場人物も曖昧でいわゆる“神秘のベール”に包まれています。私は故郷が奈良ですから昔、おばあちゃんに連れられて神社やお寺、それから新興宗教の集会に行きました。ですからいろんな宗教に触れる機会がありました。不思議な礼拝の儀式や経典のようなものを読まされたり、歌ったこともあります。小学校低学年の時にはその宗教の集会に出ないと敷地の中にあるスイミングプールに入れてもらえないので参加したこともあります。時々、質問すると「これはこういう意味や」といった程度のことは教えてくれるのですが後でふと「そういう意味やと誰が決めたんや?」と思ったりしたものです。しかし今日の聖書の箇所では弟子たちは、金曜日の十字架からわずか三日後、日曜日、イエスの復活を確認しています。三日とは言っても、実質は二日、48時間程です。また、イエスの復活から50日目、ペンテコステの日に、弟子たちはもうイエスの復活を大勢の人々に宣べ伝えているのです。使徒パウロが今日のコリント人への手紙第一を書いたのは、紀元55年ごろです。パウロはこの手紙の中で、はっきりと、「キリストは、…聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられた」と言っています。コリント人への手紙第一は十字架から25年経っていますが、それは、イエスの死を目撃した人たちがまだ生きていた時でした。イエスの、あのむごたらしい十字架の死が人々の心に焼き付いていた時代です。そのような人たちの間から復活の神話が生まれるはずがないのです。キリストの復活は事実なのです。

## 2)キリストの復活がもたらす永遠のいのち

永遠のいのちとは未来に向かってゆく力とも言えます。キリストの復活は、最初から、事実としてクリスチャンの間で信じられていました。教会は、はじまりからキリストの復活を宣べ伝えました。教会が最初から「復活の信仰」を持っていたことは否定できない事実です。徐々に付け足していったのではないのです。では、その「復活の信仰」はどこから来たのでしょうか。「復活の事実」からとしか説明のしようがありません。使徒たちは復活をひとつの教義として伝えたものではありません。「キリストはよみがえった」という事実を宣べ伝え、その事実が持つ意味を解き明かしたのです。

イエスが葬られた墓はエルサレムの近郊にありました。イエスの遺体が収められたあと、墓の入り口は大きな岩で塞がれ、厳重に封印され、ローマ兵がそれを守りました。しかし、イエスの復活とともに、封印は破られ、岩は転がり、ローマ兵は逃げ去りました。イエスは死に勝利したのです。すべての人を呑み尽くす墓も、イエスを留めておくことができなかつたのです。それ以来、イエスの墓は空っぽです。どの宗教の教祖も、その墓が大切にされ、人々は教祖の遺体や遺骨を拝むため、そこにやってきますが、イエスの墓に来る人は、空っぽの墓を見て、「あなたがたは、どうして生きている方を死人の中に捜すのですか。ここにはおられません。」というメッセージを聞くのです。実際、エルサレムの「園の墓」の入り口には、ルカ24:5-6にあるこの言葉が掲げられています。もし、ユダヤの指導者が、使徒たちにキリストの復活を宣べ伝えるのをやめさせたいのなら、イエスの墓を示せばそれで済んだのです。しかし、ユダヤの指導者たちにはそれができませんでした。イエスの墓が空っぽだったからです。イエスの復活は反対者たちでさえ、否定することができなかつたのです。

私たちの信仰は、「キリストがよみがえった」という確かな歴史の事実に基づいています。また、復活したキリストに出会った人々も、聖書の記録と共に、復活を証しました。コリント人への手紙第一が書かれた頃、復活のキリストに出会った人たちはすくなくとも五百人はいたとパウロは言っています(6節)。パウロはその復活の証人のひとりに「ケファ」の名を上げています(5節)。「ケファ」というのは「ペテロ」のことです。ペテロは十二弟子の中で第一人者とみなされた人でした。ところが、ペテロはイエスが大祭司によって裁かれたとき、ユダヤの指導者を恐れ、「私はイエスなどという人は知らない」と言ってイエスを否んでしまいました。それから後のペテロはひどく落ち込んで仲間と一緒に家に鍵をかけて恐怖の中で息をひそめてじっとしていたのです。ところが、それからわずか50日後、ペンテコステの日に、ペテロは、エルサレムの真ん中で、イエスを十字架につけたユダヤの指導者たちを前にしてこう言いまし

た。「このイエスを、あなたがたは律法を持たない人々の手によって十字架につけて殺したのです。しかし神は、イエスを死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。」(使徒 2:23-24) このペテロの変化はどこから来たのでしょうか。心機一転汚名挽回とばかり頑張り出したのでしょうか？ そんなことあるはずがありません。自分のいのちを失うのではないかと恐れていた人が突然、自分のいのちの危険が及ぶようなことを大声で言い、行動したのです。自分はいつ死んでも良いと死を恐れていない言動であり行動です。そのようにできた理由は何でしょうか？それは自分のいのちに優るものに出会ったからではないのでしょうか？ それはキリストの復活です。復活のイエスに事実会ったということなのです。キリストの復活の事実がペテロに人生を死をも恐れない前向きな生き方へと変えました。水野源三さんと同じような境遇を通られ、首から上しか動かなくなり、絵筆を口に加えて絵と詩を書かれた星野富弘さんはこのような有名な詩を書かれました。「いのちが一番大切だと思っていたころ生きるのが苦しかった

いのちより大切なものがあると知った日生きているのが嬉しかった」星野富弘 死の恐怖を乗り越え、生きる喜びはいのちより大切なものがあるということ、それはイエス・キリストの十字架の死と復活によって示された神の愛しかない聖書ははっきりと言っています。

私たちは時々、「私の人生にどういう意味があったのか？」と人生を総括するような問いに立つ時があります。考えてみるのですが答えが出ないまま、少し進んでは振り返る、そんなことを繰り返しています。ブレーキを踏みながらアクセルを吹かしているようなもので前向きではありません。ペテロの人生が前向きに変えられたのはキリストの復活によるのです。復活されたキリストのことばのいのちによるのです。

3)キリストのもたらす恵み、それは再会の希望と喜びです。

コリント第一 15:20 に「今や、キリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました」とあります。初穂とは先陣を切って最初の実る穂のことです。このあとぞくぞくと実った穂が表れ、収穫を迎えます。桜の開花宣言が出た途端、一気に満開の桜が咲くようにキリストの復活はキリストを信じている者がやがて一気に復活することを教えています。しかも今度復活する時には死もなく、病も、悲しみもない状態です。また魂や霊といったものではなくはっきりとかたちあるものとして復活します。コリント第一 15:49 に「私たちは、土で造られた人のかたちを持っていたように、天に属する方のかたちも持つことになるのです」とあります。その最初の見本が復活のキリストです。今日迎えるイースターまで多くの兄弟姉妹を天に送りました。召されました。しかし、復活の信仰によって私たちには天において再会の希望が与えられています。私はすでに召された兄弟姉妹と再び会う時にはどのような姿だろうかと想像します。一つ確かに言えることは黙示録 21:4 で言われているように「もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しきもない」中で再会するというのです。老いることも無ければ、病も無い、あるのは喜びと平安だけがあるのです。

誰であっても例外なくいずれこの地上の生涯を終える時がきます。しかしキリストの復活を信じる者には死を超えた永遠のいのちが約束されています。すでに召された方々との再会の時を期待しつつ、与えられている日々の歩みを進めたいと願われます。まだ十字架と復活の主イエスを信じておられない方がいらっしやいましたら、十字架と復活のイエス・キリストを私の救い主として信じて心に受け入れていただきたいと思えます。